

京都市の未解放部落出身で、全解連(現・人權連)京都市協議議長も務めた作家の菱崎博さん(71)がこのほど、舞鶴市内の未解放部落を舞台にした小説『舞鶴湾の風』(本の泉社)を出版。封建時代に形成されるはずの未解放部落が、なぜ明治になって舞鶴だけ新たに作られたのか、真の解決策とは。約20年かけて歴史を取材し、地域に生きた人々の群像を浮かび上がらせ、その解明を模索しました。

長編小説としては出身地を舞台にした2002年の『西からの夜明け』(かもがわ出版、上下巻)以来の作目。16年4月から3年9カ月続いた、月刊誌『人権と部落問題』(部落問題研究所)の連載に加筆しました。「おじいちゃん」の思い出になる」との孫・荀幾さんの一言が背中を押し、娘の朋衣さんの支援も受け、出版を決意しました。舞鶴の未解放部落の歴史に触れたのは、菱

部落問題の真の解決へ

未解放部落形成の「謎」20年かけて取材

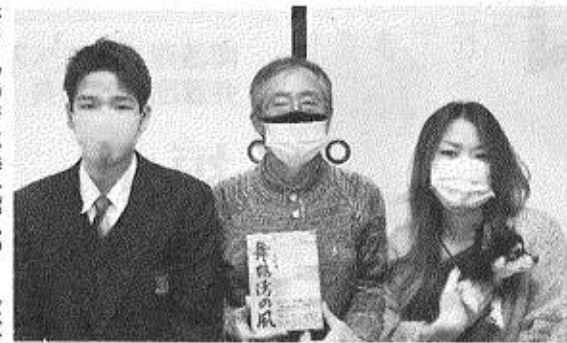
菱崎博さん出版
『舞鶴湾の風』



菱崎博

『舞鶴湾の風』の表紙

(右から)朋衣さん、博さん、荀幾さん



崎さんの青年時代。部落問題の京都の研究会に参加し、各地の歴史や運動を学びました。その後、活動で交流を深めるなか、当時、全解連舞鶴地協の役員だった山内重夫、坂根正一、浦田鉄蔵の各氏、田岡喜作・日本共産党市議らから、舞鶴では、江戸期の未解放部落に加え、明治期に鳥取から移住してきた人々によって未解放部落が形

成されたことを聞かされました。「なぜ、明治になって舞鶴にだけ新たな未解放部落が形成されたのか。菱崎さんは、疑問を抱きました。前作のもとになる新聞連載が始まった1998年、舞鶴の役員から歴史を書くように頼まれ、

取材を進めるうちに。その結果、明治後期、東舞鶴に軍港を建設する過程で、鳥取県で生活に困窮する未解放部落出身の人々が、新天地を求めて集団移住して集落が形成されたことや、雇用主は鳥取から移住してきた人々に

対する差別を賃金体系や雇用政策に利用し、隔離政策を進めたことも明らかになっていきました。小説では冒頭、鳥取の人たちが開通したばかりの山陰線を頼りに、歩いて舞鶴に向かう姿を描写。博打が絶えない飯場の小屋を出て、集団で竹林の掘って、集団で竹林の掘って、集団で竹林の掘って、傾斜地の谷筋に住むようになった経過や、危険な労働で仲間を失い

会った人々から着想を得ています。後半、奈良で水平社が設立されて後、舞鶴の人々が浄土真宗の2人の僧侶の援助を受け、生活環境・労働条件の改善を求め立ち上がる場面も描かれます。援助した僧の一人は、水平社を設立時から支援した浄土真宗本願寺派の僧侶・三浦参玄洞がモデルです。

菱崎さんのものには、明治期に無権利だった労働者の姿を想起させるとして『蟹工船』『野麥峠』を思い出した、資本と闘う姿から『三池炭鉱労働者を歌う』『地底の歌』が聞かえたなどの感想が次々と寄せられています。菱崎さんは「舞鶴の歴史を伝えてくれた部落解放運動の先輩たち、家族の支えで出版にこぎつけられた。部落問題や他の人権差別の問題も、なぜ、その人々

差別に抗した人々を描く

ながらも、支え合い生きてきたドラマが鳥取の言葉を交えたテンポのよい展開で描かれています。男性と同じ重労働を志願するリーダー的な女性をはじめ、いんぎんな雇用主など、個性的な人々の造形は、菱崎さんが少年期や、部落解放運動、勤務先の京都市役所などで出

が不当に差別されることになったのか、そのメカニズム、人々は差別とどうたたかっていたのかを知ることが真の解決の道であり、人権を発展させることになる。その一助になれば」と語ります。

なされたことを聞かされました。「なぜ、明治になって舞鶴にだけ新たな未解放部落が形成されたのか。菱崎さんは、疑問を抱きました。前作のもとになる新聞連載が始まった1998年、舞鶴の役員から歴史を書くように頼まれ、

A5判上製。350円。2200円+税。本の泉社03・5800・8494。